

天気晴朗なれども浪高し（2）

もし日本が日露戦争に敗れば、多額の賠償金を取られ、北海道もロシアのものとなるかも知れず、国民は塗炭の苦しみに喘ぐ事になることは避けられず、日本にとっては、何があっても負けられない戦いでした。しかし、当時の日露両国を比較すると、国土の面積では56倍、人口では2倍、国家予算では8倍、更に常備兵力では15倍というように、彼我の国力差は圧倒的でした。ですから、日本は極力ロシアとの戦争を避けるために努力するのですが、それにもかかわらず小国日本がロシアという大国に戦いを挑んだ背景は、何だったのでしょうか。

当時の世界情勢は、欧米列強が植民地の獲得競争に明け暮れ、中国はそれら諸外国に多くの富と領土を篡奪されていました。日本にとっては、それを間近に見ながら如何に国家として独立を維持するかが焦眉の急でした。しかし、日本は、開国してから50年、明治政府が樹立して僅か40年という、誕生したての弱小国家であり、ようやく近代国家への入口に足を踏み入れたに過ぎません。一方、極北の大国ロシアは不凍港の獲得を目指し南下を続けていたのです。

日本は、日清戦争に勝利し下関条約により遼東半島の割譲を受けますが、これに対して南下を目論むロシアはドイツ、フランスと共に遼東半島を清に返還するよう日本に圧力をかけます。これが世にいう「三国干渉」ですが、ロシアは、日本が返還した遼東半島を中国から租借し、そこに海軍基地を建設してしまいます。

更に、1900年、中国に義和団事件が起きると、日本・ロシア・イギリス・フランス・アメリカなどが派兵し、これを鎮圧するのですが、ロシアは、事件が終結した後も大軍を満州に駐屯させ、居座りを続けるだけでなく、朝鮮半島への進出をも目論み、日本への圧力を日増しに強めていきます。

新興国日本にとって、超大国ロシアの南下は脅威であり、当時の日本においては、独立と安全を守る為には朝鮮半島へのロシアの進出を阻止するという選択肢しかなかったのだと思います。

日露戦争は、朝鮮半島や満州を舞台に戦われましたので、中国や朝鮮半島の

人々にとっては、日本もロシアも共に侵略者ということになります。そして、その立場で歴史を見れば、日本は自国の利益のために、ロシアと共に中国や朝鮮に多大の損害を与えたことはけしからんということになるでしょう。しかし、日本の歴史を日本の側から見れば、独立を守るために止むを得ず超大国ロシアに戦いを挑んだ日本の姿が見えてくるのではないかと思います。

当時ロシアは、小国日本など歯牙にもかけぬ勢いでした。恐らく、ロシア国内では、ロシアが日本と戦って負けることがあるなどと想像できたひとは皇帝ニコライ二世はじめ誰もいなかったのではないかと思います。

一方、日本の側からすれば、如何に大国といえども陸軍の大半はヨーロッパに配置されており、満州に駐屯する軍隊となら十分戦える力があり、また、海軍についても、ロシアは英仏に次ぐ海軍国ではありましたが、戦力を太平洋、バルト海、黒海の3つに分散していたため、太平洋艦隊とだけなら日本海軍は十分に勝算があったのです。

結果、日本は日露戦争で勝利を得ましたが、それは圧倒的な強さで勝利したものではありません。確かに、日本海海戦では連合艦隊の一方的勝利に終わりましたが、大陸では戦線は膠着していました。そのまま戦いが長引けば日本の国家財政は破綻したことでしょう。従って、満州のロシア軍を完全に駆逐することなど不可能なことだったのです。

そうした中、当時の日本のリーダー達は戦争に勝つために脳漿を搾りました。

日英同盟を基軸に国際的な孤立を避けると共に、早期の戦争終結に向け、アメリカの理解と協力を取り付け、更には、開戦当初から明石大佐を通じてロシアの革命勢力を資金援助する等して、ロシア軍の後方をかく乱したこと等、当時のリーダー達は大きな戦略を描きそれを実行していきます。

そして、203高地の激闘はじめ、日本海海戦など幾多の戦闘において、優れた戦術、兵士の忍耐力と犠牲的精神を以って良く戦い、かつ、幾つかの僥倖が重なって日本軍はついに勝利します。

しかし、この日露戦争の勝利という成功体験が、その後の日本の進路を誤らせ、悲惨な結果を招くに至ったことは、歴史の大きな教訓として忘れてはならないことだと思えます。(塾頭 吉田 洋一)